

大分日帰り研修

南蛮B V N G O交流館と
埋蔵文化センターを見て

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

本年度の日帰り研修は、九月二十一日に実施された。台風十七号が沖繩近辺に接近し、風が強い一日でしたが参加者は十六名。朝七時五十分に文化会館下の駐車場を出発し大分へと向かいました。

今回の研修の目的は、平成三十年(二〇一八)十月に開館した「南蛮B V N G O交流館」の視察と埋蔵文化センター(旧大分芸術会館)での展示物見学及びキリシタン関連講習会への参加です。

大分への車中、大友氏に係る話が紹介されました。大友氏と島津氏との戦いについては、豊薩戦争で当時佐伯を治めていた梅牟礼城主佐伯惟定が堅田西野・岸河内・汐月方面で島津軍と戦い長瀬原で大勝利をあげた事、大

友氏の総大将の大友義統が上野館うののやぐたから高崎山城に逃れ、最後は宇佐の龍王城に籠ったという事、秀吉より派遣された長曾我部元親信親親子、仙石秀久、十河存保等そごうまさやすの三千もの援軍が戸次川河原合戦で敗北した事など多くのエピソードが伝えられています。

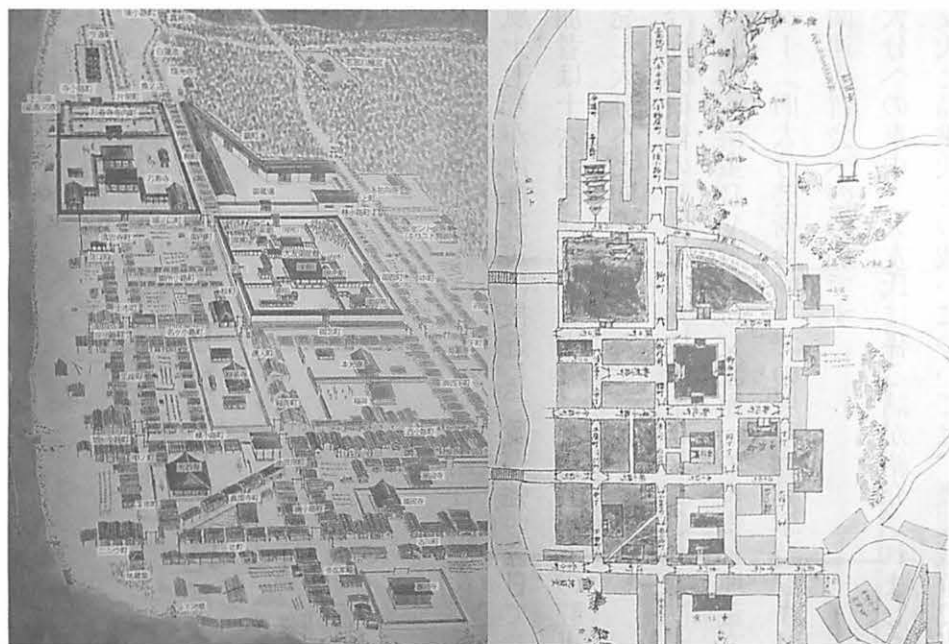
この豊薩戦争の際、第十三代將軍足利義輝公より大友氏が拝領した茶器「佐伯肩衝」かたつきが島津軍に持ち去られ、その茶器を梓峠の戦い(宇目)で佐伯惟定が奪還し、佐伯氏改易の際持ち出し、伊豫の藤堂高虎、江戸の徳川家康の手を経由して現存している事などの話がありました。

一、南蛮B V N G O交流館

本日、訪問する南蛮B V N G O交流館は、大友宗麟の時代の旧万寿寺跡近くの大友館跡内に造られた資料館で、発掘の際の資料を展示していた大友体験学習館を移設したものです。

ここ大友遺跡の調査研究は、昭和六十二年(一九八七)、大分市史編集作業中に発見された「府内の古地図」と現在の地図との比較から始まり、古地図をもとに「戦国時代

の府内復元想定図」を作成し、その検証を各地で細々と発掘調査を行ってました。



戦国時代の府内復元想定図と府内の古地図

本格的に発掘調査が行われたのは平成八年（一九九六）の中世大友府内町跡第一次発掘調査からです。

平成三十年（二〇一八）までに一三二次もの発掘調査が行われました。

平成六年（一九九四）には、これら発掘された遺跡群が「中世大友城下町府内」として登録されました。平成九年（一九九七）から大分駅周辺の総合開発事業に伴い大規模な発掘が開始されました。

平成十年（一九九八）には、大分駅周辺の整備総合開発により移転した森産業コマ打ち大分工場跡地（顕徳町三丁目）から巨石が多数発見され、「大友氏の館跡」ではないかと注目を浴びました。その後、平成三十年（二〇一八）までに三十八次の「大友館跡発掘調査」が行われました。この顕徳町の巨石は幅が一mから一、八mに及ぶもので、その後の研究で大型の景石が配置された「池を伴う大規模な庭園遺構」であることがわかりました。これらの発掘により大友館の外郭施設や東側の築地塀などの遺跡や南蛮よりもたらされた陶磁器片などの



平成十年に発掘された大友館の庭園（整備中）

数多くの遺物が発見されました。これらは近くの埋蔵文化センターなどに保管されるようになりました。

遺跡群の中には、大友時代の幅八mの大友館の正面を通る南北道路や、その道路とクロスする幅七mの東西道路、交差点跡が五十cm下から発見されました。

道路の中央には幅三mの玉砂利で舗装されたあとも発見されました。この大友館跡の一角に南蛮BVNGO交流館が建てられています。現在、令和二年（二〇二〇）の大友氏館跡庭園遺構公開に向け、調査整備を行っています。

現在目にする庭園は、実際の庭園遺構の上に保護土をかぶせ、その上に防水シートを張り更に改良土をかけたもので整地しています。庭石などはレプリカを造り配置しています。植栽する樹木も発掘調査で得られた花粉や種子を調べ、その樹木を植栽しています。カエデ、五葉松、黒松、山桜、しだれ柳、シヤガなど四十種類以上の樹木草花を配置しています。

今回発見された池は、東西六十七m南北三十mの大きさの楕円形の池で東池には景石が多く西池には少なくという動静を表す座観式の庭園だそうです。最盛期の大友

氏館は一辺が約二百mの規模のほぼ正方形の形をしており土井廻り塀などで囲まれていたそうです。

大友館跡の中心建物として東西十五m以上、南北三十mの建物の基礎礎石が発見されています。この全景はこの南蛮B V N G O交流館から見ることが出来ます。

大友館跡だけで四万平方mの広さがあります。現在、この大友氏館跡は国指定史蹟になっています。

この大友氏館跡は平成十三年(二〇〇一)までは、人々が生活しており約二〇年かけて遺跡外の土地に移転していただき発掘が続いています。

この他に大友氏全盛時代には、館周辺に旧万寿寺跡、唐人町跡、府内教会(ダイウス堂)跡、推定御蔵場跡、上野館跡などがあり、全体の広さは十六万平方mと云われています。

私たちは、この交流館から大友館の池の遺構を見、大友館の大門跡、小門跡、主殿の位置を教えてくださいました。

二、よみがえる府内の町

交流館で柴尾照夫さんの説明を聞いた後、シアター

コーナーで「よみがえる府内の町」「豊後王 大友宗麟」という二本のビデオを視聴しました。

中世の町「府内」は、今から千五百年ほど前、大分川左岸につくられた町で、南北二、一km、東西〇、七kmの町です。三代頼泰から五代貞親の時代に完成したそうです。全盛期には上原館、御蔵場、旧万壽寺、唐人屋敷、大友館などの他四十余りの町が並び、五千軒もの家々が立ち並んでいたと言われています。

大友氏は初代大友能直から第二十二代大友義統まで約四百年にわたり続いた一族で、もともとは関東相模国(小田原丘陵の北)北大友東大友の出身です。

初代大友能直は鎌倉幕府の御家人で、文治五年(一一八九)源頼朝の奥州藤原氏との戦いに参加、建久四年(一一九三)富士の裾野の曾我兄弟の斬り込みから頼朝を助けた功等により、建久七年(一一九六)豊後の国を貰います。しかし初代能直、二代親秀までは豊後に下向せず京都で生活していたそうです。三代頼泰の時、元寇の役が起こり、博多湾に防塁を築くために下向したそうです。この元寇防塁作りに佐伯氏も参加しています。五代大友貞親は当時西国一と呼ばれた万寿寺を造り

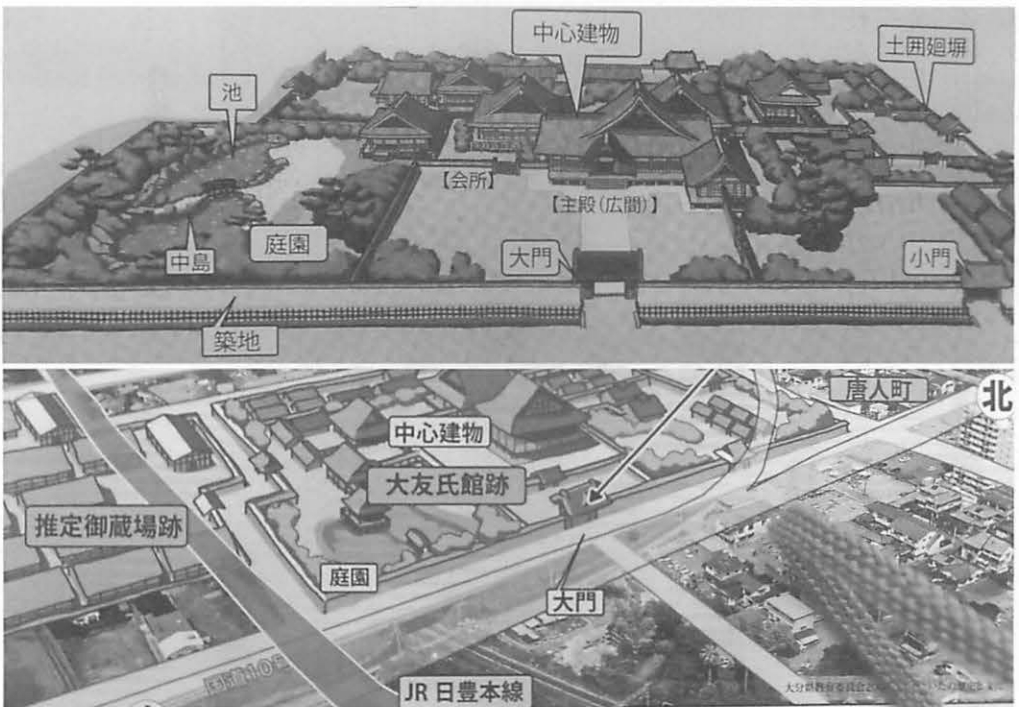
ます。この万寿寺は当時五山十刹の一つと呼ばれていた博多の承天寺の人々をよんで造っています。

しかし、この万寿寺は豊薩戦争時の上原館攻撃の際焼失してしまっています。十代大友親世は、現在発掘中の大友館を完成させています。その後文禄二年（一五九三）の大友氏改易まで続きます。

特に知られている武将には、大友氏中興の祖と言われる大友親世（十代）や南北朝時代に佐伯水軍が参加し戦った姫嶽合戦の大友持直（十二代）、耳川の合戦や堅田合戦等の豊薩戦争時の大友宗麟（二十一代）、佐伯氏の改易につながる大友義統（二十二代）などがあります。大友宗麟の二階崩れの変は大友氏史上有名です。改易され大友義統が水戸に幽閉されていた時、大友氏の政務を綴る「大友義統左兵衛日記」を表しています。

《大友家系図》

- | | | | |
|--------|-------|-------|-------|
| 初代大友能直 | 二代親秀 | 三代頼泰 | 四代親時 |
| 五代貞親 | 六代貞宗 | 七代氏泰 | 八代氏時 |
| 九代氏継 | 十代親世 | 十一代親著 | 十二代持直 |
| 十三代親綱 | 十四代親隆 | 十五代親繁 | 十六代政親 |



大友館想定図と現在図との比較

- 一七代義右 一八代親治 一九代義長 二〇代義鑑
- 二二代義鎮 二二代義統

この府内の町は、「大友氏遺跡整備基本計画」として策定され現在第一期事業を進行中です。

この第一期整備計画は国指定された五つの遺跡跡（大友館跡、唐人町跡、万寿寺跡、推定御藏場跡、上原館跡）の内、中世大友氏の居館のあった大友館跡と南蛮貿易の際、交流の地点であった唐人町跡を、大友宗麟公生誕五百年の令和十二年（二〇三〇）にあわせて遺跡発掘し保存、その上にそれぞれの施設を復元して、一大歴史学習の場として公開する予定です。二〇三〇年以降は第二次長期整備事業として新たな計画を実施する予定です。遺跡調査は大友館跡だけでなく旧万寿寺跡、唐人町付近にあった称名寺跡しょうみやうじあわなども並行して行われています。

旧万寿寺は東西二五〇m、南北三六〇mに及ぶ巨大寺院で北側から幅八m深さ三mの堀が発見されています。現在寺小路町・片側町付近の発掘が進められています。

称名寺は八代大友氏時の帰依によって暦応四年（一二三四）に開かれた時宗寺院で、のち沖の濱（現在

の春日浦から住吉川入口付近）に移転した寺です。

三、豊後王「大友宗麟」（一五三〇〜一五八七）



大分市駅前立っている大友宗麟は、戦国時代とよばれる時代、国内外に目を向け「世界の豊後王」と呼ばれた。天文十四年（一五四五）ころより、日本周辺には多くの中国・ヨーロッパの船が押し寄せ、府内の町にも数隻のポルトガル船がやってきました。

宗麟が十五歳の時の事で「海の向こうの世界」を知る第一歩でした。

天文二十年（一五五二）、キリスト教布教の為山口に滞在していたフランシスコ・ザビエルを府内に招き、船の寄港を許し、キリスト教布教の許可を与えました。その見返りとしてポルトガルをはじめ中国・朝鮮・東南アジア、ヨーロッパとの交易を要請し、巨大な船を仕立て直接貿易を行うようになりました。次第に勢力を増した宗麟は、最盛期には府内を中心とした九州六カ国を治めるようになりました。この事は大友宗麟書状（戸次文書）などで確認されます。

当時外交関係を保っていたカンボジアの国王からは「日本の九州大邦主」と呼ばれていました。キリスト教の布教により、府内には多くのキリスト教の施設、聖堂や教会、学校が作られ、ルイスフロイス等の宣教師達が府内の町を闊歩していたと思われます。この様子は南蛮屏風絵図や西洋画などで見る事ができます。西洋画で有名なのはドイツのヴァイセンシュタイン城シェーンボルン伯爵コレクションの「豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル」です。この絵はイギリスの宮

廷画家アンソニー・ヴァンダイクの作品です。このように宗麟はヨーロッパの人々にも受け入れられた偉大な大名です。大分市内勢家町神宮寺浦公園（春日浦）には、大友宗麟の像と南蛮貿易跡地の記念碑が建てられています。

このような偉大な大友宗麟の活躍した府内の町の発掘から、数多くの遺跡遺物が発見されています。

私たちは、南蛮B V N G O交流館の視察を終え、第二の訪問地、牧地区にある埋蔵文化センターに行きました。

四、埋蔵文化財センター

この埋蔵文化財センターは昭和四十七年（一九七二）大分市舞鶴町に大分県教育庁文化課文化財資料室として発足し、平成八年（一九九七）に中判田の旧職業訓練所跡に移転、大分県内で発掘される埋蔵文化財の収集調査研究を行っていました。しかし、施設が老朽化したため、平成二十九年（二〇一七）四月、旧芸術会館跡に移転、大分県立埋蔵文化財センターB V N G O大友資料館として発足しました。

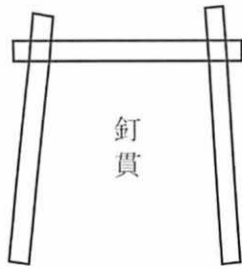
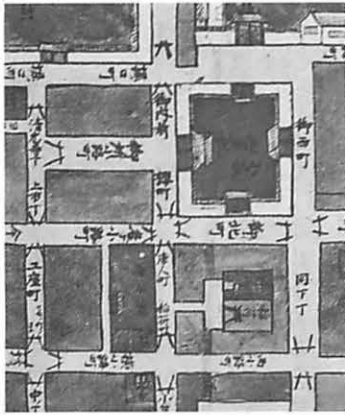
現在、この資料館には多くの埋蔵文化財が収集・保管・

調査研究・復元作業などが行われています。

南蛮B V N G O 交流館でも発掘調査でベトナム・タイ・ミャンマー・中国・朝鮮などの陶磁器片、骨牌・唐枕・唐枕、キリスト教関連のメダイ等が発見されているという話を聞きました。

この埋蔵文化財センターには大友氏の菩提寺であり、この地方最大級の寺院であった臨濟宗万寿寺跡から発見された寺号「蔣山」の名が入った鬼瓦や、観音殿の瓦などが展示されています。そのいくつかを紹介しましょう。初めに展示されていたのは釘貫遺構と呼ばれていた町の出入り口を示す遺物でした。

釘貫とは二本の柱を立て間に横木を通した簡単な柵です。中世都市では木戸として町筋の角々に立てられています。



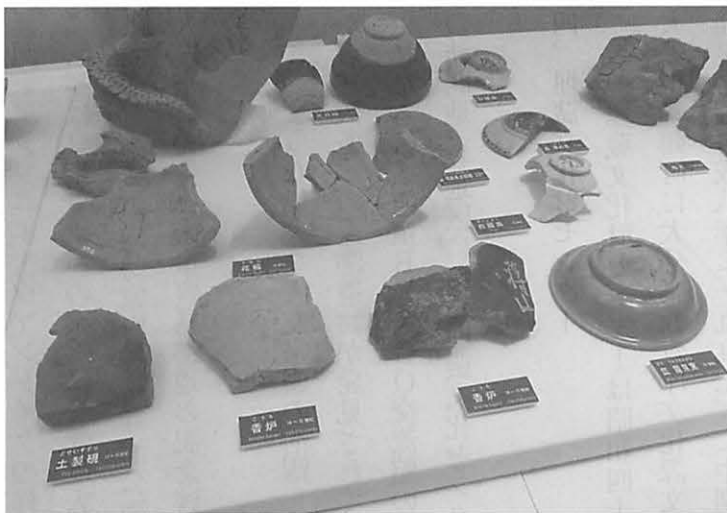
ました。府内古図では街路ごとの交差点に多くの釘貫が造られていました。

府内の町の始まりは、平安末期に営まれた河原市と考えられています。

大友館の前面には、商人や職人の居住した町屋が立地していました。京都や周防の国（山口県）のような西日本

エリアにおける戦国時代の都市構造が見られません。町屋は道路に沿って掘立柱建物（間口二間・奥行四〜六間・妻入構造）が建てられています。

道路は南北四条東西五条の街路があり、名ヶ小路町、横小路



町などの名が残っています。

出土品には大友氏の定紋である「三木紋」の分銅や銅銭土器、椀、木札、箸、瓦片、銅鏡、念持仏、ファイゴ、ヤットコ、しゃもじ、まな板、硯の素材、鉛の素材、るつぽ、平瓦、丸瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、伏間瓦、香爐、花瓶、白磁皿等。



鬼瓦片

キリスト教で使用されたメダイ（メタル）等が次々に出てきました。万寿寺関連の物としては「蔣山」という山号の付いた瓦片が出てきました。



多くの軒丸瓦片



鍔金唐枕（中国製）

発見された物の中には、中国や南蛮から持ち込まれた漆器や陶磁器、コンテナ壺、金箔の土師器、キリスト教徒が祈りをささげるために用いたロザリオ、真鍮製の鎖、メダイ、コンタツなどが出てきました。

中国から伝わったと思われる布と木材で作られた枕（鍔金唐枕）なども出てきました。

このような物の他に府内で自らが作り上げた製品も展示されています。この展示物を見るだけでもたっぷり時間が必要です。是非一度見学に行く事をお薦めします。

私たちは、この埋蔵文化財センターでの見学を終え昼食へ。午後からの研修は、すぐ近くの平和公園にある能楽堂でキリシタン関連の講演二本を聞きます。

講演のタイトルは「キリシタン墓地の考古学」（講師：別府大学教授 田中裕介氏）、「下藤キリシタン墓地の調査成果」（講師 白杵市教育委員会 神田高士氏）の二本です。